

C・S・ルイスの「ダイマー」について

——通過儀礼の詩として——

川 崎 佳 代 子

キー・ワード：ロマンティズム

1926年にデント社からクライヴ・ハミルトンというペンネームで出された「ダイマー」は1922年から25年にかけて書かれた長詩である。詩人としてのキャリアを念頭においていた頃であり、ルイスにとって、もっとも野心的で重要な作品であった。しかし、好意的な書評はもらったが、商業的には失敗で、ほとんど売れなかった。後に別のジャンルでルイスは有名になり、彼の詩も再び紹介され始め、1950年に「ダイマー」も再版された。売れなかった理由は、「ダイマー」を書いていた時代、精神的にもバランスを欠いていたことであるとルイス自身が述懐しているが、むしろ、長詩が時流には乗っていなかったことが大きな理由であると思われる。とはいえ20代に書かれたこの詩には、彼が通過してきたさまざまな状況が色濃く出ている。特にルイスが無神論から観念論者に推移するころの作品であることから、1933年の『天路退行』と合わせて読むと、ロマンティズムの影響下にあったルイスを知る上で重要な作品だということがわかる。本稿では、「ダイマー」を解釈しつつ、詩の意義を検討したい。

1. ダイマーの成り立ち

1950年の「ダイマー」再版に付けられた序文において、ルイスは、詩には「見いだした」詩と「もたらした」詩の二種類があるとし、「ダイマー」は前者のタイプ、つまり「わたしのものに訪れた詩」とみなしている。「『わたしのものに訪れた』ものというのは、謎めいた花嫁によって怪物を世に出した男がおり、その怪物は父を殺すやいなや神になる、という物語である。この物語は完全な形で私の心にわき上がったのだ。17歳のときである。考える限りにおいて、私は意識的にしろ、自発的にしろ作り上げたのではない。単純な意味での夢でもなかった。その詩はそれではなく、ある時もう存在していたということだ」(Lewis, "Preface", *Narrative Poems*)。実際は9章すべてが完全な形で浮かんだのではない。最初は散文で書き始めたらしく、タイトルも「アスクの贖い」(*The Redemption of Ask*)であったが、これは現存していない。それから中断し、再び着手したのが1922年である。それ以来脱稿するまで、少しずつ毎日書き進んでいったことが日記で明らかである。1章書き上げると、ハーウッドやバーフィールド、

コグヒルといったオクスフォードの友人たちに読んでもらい感想を聞いていた。したがって、「完全な形で」浮かんだというのは、中心テーマになる神話のことを指しているのである。完成版は、ライム・ロイヤル (ababbcc) という詩形で書かれている。これは長い物語に適した詩形で、チョーサーが『トロイラスとクレンダ』で使用した様式である。1922年といえば、T・S・エリオットが『荒地』を出した年であり、詩は自由詩が主流になってきていた。よほどの詩人のものでないかぎり長詩が読まれることはなかったようである。

2. 第1章

33連から成る。語り手はダイマーの生まれた環境と教育について説明し、その環境から彼がある日突然目覚め、脱出する様子を語っている。書き出しは風刺的で歯切れがよい。

ダイマーが生まれたとき、彗星が現れて国民を脅かしたりはしなかった。

公営の託児所が他の子どもたちといっしょに彼をのみ込んだ。

そして20もの異なる教育委員会が彼を取り囲んだ。

彼はあらゆるテストを受けさせられた。

予防接種を打たれ、番号をつけられ、洗われ、服を着せられて、

学監のまえに呼び出され、調査され、鞭打たれ、毎週試験を受けさせられ、

そして、およそ19年の間、彼はおとなしくこれに耐えた。(I-6) (以下詩の訳は筆者による)

ダイマーが育った町は〈完全な都〉と言われ、すべてが計算され、合理的な環境をもつ都市である。この都市のモデルは、「序文」でルイスが説明しているとおり、プラトンの『国家』に描かれた理想的な国である。感情はいやしいものとされ、情操教育を欠いた理性優先の教育が施される都なのである。ルイスは、「プラトンの作品はすべて好きだが、『国家』だけは嫌いだ」(“Preface”)と述べている。嘘を述べるとして、詩人が追放されるような国だからである。「愛も計画の中に組み込まれ／国は優生学的見地から結婚相手も／決めてしまうのだ。その時期さえも。求愛の歌も踊りも／法で決められ、偶然の入る隙はない」(I-3)。このように、優生学的に誕生をコントロールする点で、〈完全な都〉は全体主義的な国家である。この都の敵は〈自由〉と〈自然〉である。SF三部作『かの忌まわしき砦』で描かれるNICEに近いと思われる。NICEでは自然は厭わしく、感情はすべて主観的でリアリティではないと見なされるからである。三部作にあるように、この詩においても、〈人工〉と〈自然〉という二項対立が見られる。

ダイマーがこの都での生活から目覚めるのは19歳で、きっかけは鳥の声である。時は春、やさしい微風にダイマーは初めて自然の息吹を感じる。

微風がダイマーの頬をなでた。
窓を見上げると、茶色の鳥が一羽
敷居に止まり、さかんに
羽繕いをしていた。—ダイマーはあわれにも鳥を眺め
不安を感じた。教壇からは教師の声が聞こえたが
眠気を誘うだけだった。狭い部屋は
眠たげで、いかめしく、陰鬱であった。(I-8)

狭い閉ざされた空間の中で、ずっと管理されてきたダイマーは突然自然の麗しさに気づき、心を騒がせる。彼は思わず大声で笑ったので、教師は驚き、幽霊を見るかのような顔つきをして、静粛にするよう注意した。しかしダイマーは一層大きく笑い、教室にいる仲間は信じられない光景に、おののいて見守るだけだった。彼は立ち上がり、呆けたような笑い声をあげた。気分が高揚して指先まで力がみなぎったダイマーは、邪魔をする教師を殴り、死なせてしまう。

静まりかえった部屋から、暗がりから、
太陽のふりそそぐ外へと、ダイマーは出てきた。そこに
とつぜん微風が吹き、ヒバリが空高く飛んでいた。
さえざえとした空には乳色の雲が浮かび、
とつぜんトランペットの響きのよう
に輝いた。・・・ (I-11)

教師を殴り殺したことについてこの時点でダイマーは一切罪の意識を感じていない。もっと大きなものに突き動かされているのである。自然の美しさに魅せられて歩き出し、自分の着ている制服が、4月の陽気さへの侮辱のように感じるのだった。

彼は言った「この土くれを長く着すぎた。
さあ、おさらばだ。」そして、広々とした野原の中で
囚人服をかなぐり捨てた。
靴下、上着、シャツに下着まで、すっかり捨てて
生まれたままの姿ですっきりと立った。太陽の光を
遮るものは何も身につけなかった。それからしばらく
裸足で、冷たい川床から水を跳ね上げた。(I-16)

それからダイマーは森に入っていく。森は人の手が入っていない神秘的自然を表す。びっし

りと木の生えた森の中に入り、手探りで進んでいくと音楽が聞こえる。それは彼の胸を突き刺すような響きであったが、途中でとまり、ダイマーは憧れが満たされないままに残される。

このように、第1章は突然襲いかかった自由へのあこがれに突き動かされて、目的もなく放浪するダイマーの姿が描かれている。ここで、彼の憧れを引き出したのは、春、微風、鳥のさえずりといった自然であり音楽である。『天路退行』(1933)でも、幼いジョンを外へと促したものが花、鳥のヴィジョン、音楽であることから、ルイスにとって〈憧れ〉を誘発するものは〈自然〉と音楽であることがわかる。1章の終わりで、大きな屋敷を見つけたダイマーはそこに入って行く。この屋敷は、門もかからず、門番もいず、扉は開け放されていたが、「人を寄せ付けぬ雰囲気があり／入るのをためらわせた」(I-31)とある。不安を抱きながらも、声をかけながらダイマーは中に入っていく。

第2章

33連より成る。5連では、部屋の中の鏡に映った自分の姿にダイマーがはっきりと自己に目覚める様子が描かれている。「ずっと離れたところに、一人の荒々しい目をした、裸の男がいるのに気づいた。／その男は自分の方にやってくるのだった」(II-5)。もちろん、これは鏡に映ったダイマー自身である。鏡には色とりどりの服が掛けてあり、彼はとっかえひっかえ服を試してみる。それまでダイマーはずっと1種類の服しか知らなかったのだ。学年と等級を示すバッジをつけて過ごしてきたので、そのような色彩豊かな服を見たことがなかった。「ここには規律はない。監視する目もない／入る許可も要らない」(II-7)とダイマーは叫ぶ。そして、服を着たダイマーは自分が美しいことに気づくのである。王侯貴族の服を身につけ、鏡にむかって偉くなった気になる。都へ戻り、若者たちを指導し、反逆に駆り立てようかとも思うのである。

1章と2章において、ダイマーはジークフリート的经验を通過しなければならないとルイスは詩の説明をしている(“Preface”)。ジークフリートは森でドワーフのミーメに育てられ、あるとき、水鏡で自分の姿を初めて映し、ミーメが親ではないということを知る。そして、育ての親を捨て、自分の人生を求めて旅立つ。彼はミーメに縛られていたが、そこから解放され、自由を感じる。そういう点で、ダイマーもまた鏡により、自己に目覚める。その後ジークフリートがブリュンヒルデという伴侶を求めるように、性的な目覚めも同時に経験したダイマーは謎めいた女性と出会う。

しかし、その前に彼は空腹に気づく。すると、テーブルにはそれまで宴でもあったかのような形跡があり、彼はテーブルに飛びつくのである。「十もの都を飲み込むことができるくらい彼は飢えていた」(II-13)とある。もちろんこの箇所は、彼が文字通り肉体的に飢えていたこともあるが、精神的に飢えていることをも指している。豪華な衣装をつけ、英雄になったような錯覚さえ覚えたが、一方では孤独のせいで「安易な夢に身をやつしていた」(II-12)からである。

しかし実際は、この誰のものとも知れぬ屋敷に入り、食しているとき、自分が盗人のような気になり、「なかばびくびくとして食べた」のである。彼は「配給と、科学的に調製された食物」で育ったので、この贅沢な食卓はしらず彼を大胆にしてしまう。酒を手にして「これを飲んで、あの完全な都を飲み込んでしまおう」(II-17)と彼は思う。ここでダイマーは勝手な自画像を描き、求めるものは何でも得られるような空想にふけるのである。

そのとき、また音楽が聞こえてくる。ダイマーは「僕はさまよう者、新生したばかり、解放されたばかりの人間だ」(II-20)と叫び、喜びを求めるどん欲さや、人が求める善への憧れが、これほど荒々しいことに今まで知らなかったと気づくのである。

世界よ。僕は証明して見せよう。

大地を愛した男がいた。彼の心は

愛そのものであった。彼は、よろける足で

愛する草を拝した。覆いから鳥が飛び立つごとに心躍り、

どんな小さな花も畏れを抱いて献げもった。しかし、

彼が生きている間、大地が何の喜びも与えなかったとは

言わせないようにしよう。(II-23)

やがて夜になり、彼は「聖であり、聖でない、ひんやりとした香りが／春たけなわの、荒削りの甘さのように鋭く吹いてくる」(II-29)のを感じた。そして、暖かい枕を見つけ、横になる。この暗がりの中で、ひとつの手が彼に触れる。彼が両腕を大きく広げると「一人の若い女の息づく体が／腕の中に滑り込んできた」(II-29)のである。

第3章

33章から成る。目覚めると、森の中におり、女性はいなかった。彼は「あの人の名を／知らない。いや顔すら知らない」(III-10)ことに思い至る。それでも彼の気分は高揚していた。彼は自分の求めていたものを得たと感じたのである。しかし、その女性を捜して、屋敷に戻ろうとするが、扉という扉には黒い塊のような老婆ががんとして通せんぼうをしている。この「ものすごく年老いた、太母の恐ろしさ」(II-23)をもった老婆が何を表すのだろうか。一つはルイスと一緒に暮らしていたムーア夫人を指すという説がある。もう一つは肉欲を指すという説である。この二つは適切ではないとジョージ・セイヤーは述べている (George Sayer, *Jack*, 125)。なぜなら、ルイスは親しい知人をこのようには描かないということ。肉欲に関しては、ルイスは誘惑となる肉欲は美しい姿をとると考えるはずだから、という理由を述べている。セイヤー自身は、「罪意識」と解釈している。ダイマーは狭い檻から脱出し自由を得、自然の中に自己を見いだしたが、鏡の中で英雄になることを夢想したあげく、憧れは性的なもので満たされる

ように考えた。そしてそれに罪意識を感じていたという。セイヤーはダイマーが夢想による自己欺瞞から抜け出ておらず、謎めいた女性との再会にふさわしくないためであると述べている。彼は老婆をマイナスのイメージとしては解釈していない。それは、第6章に登場する魔術師との会話を合わせて考えると妥当な解釈であろう。しかし、むしろ、老婆はダイマーが憧れの対象を安易な性にすり替えたという間違いを示すための存在だという見方も可能である。というのは、ダイマーはこの老婆にもう一度女性と合わせてくれと嘆願したり、脅したりするが、老婆は一切言葉を発せずダイマーを無視し続けるからである。〈飲び〉の瞬間を繰り返そうしても、それは無駄であることをダイマーに悟らせようとするために頑として存在すると思われるのである。

第4章

36連から成る。屋敷に戻ることができなくなったダイマーはまた森に帰っていくが、雨と雷に打たれ、第2歌までの自信は崩れていく。天候のイメージはダイマーの心象風景であるとともに、ロマンティシズムの逃避的一面を拒否する役割を担っている。〈自然〉はやさしく、味方であると最初ダイマーは確信していた。しかし、彼は森育ちのジークフリートとは違い、都会育ちである。〈自然〉は同時に残酷になりうることを知らされる。安易な自然礼賛からダイマーの目を覚ます役割をしている。この章でも「聖であり、聖でない」というイメージは重要である。

森は荒れ狂っていた。木の枝がヒューヒュー鳴り、
反り返っていた。 光は射さず、
ダイマーは自分が誰かもわからなかった。木々は不平を叫び
自分の心臓の鼓動が混ざって一つになったようだ。
辛い喪失感とあり、美が台無しになったことだけわかった。
そのほかはすべてかすみ、混沌としのつく雨、
そして、かまびすしい音とわけのわからぬ夢のみだった。(IV-3)

つかの間感じた自信や解放感がすっかりなくなり、せつかく巡り会った女性とも言葉一つ交わさずにいたことを恥じ、後悔した。やがて、嵐の勢いが衰え、ダイマーは一人の瀕死の重傷を負った男に出会う。彼は〈完全な都〉から逃げてきたのだ。ダイマーの反抗が引き金となって、都はブランという男に率いられた反乱軍のため混乱をきわめ、軍隊が出て、反乱軍は鎮圧されたという。ダイマーは殺戮と狂気の原因を自分が作ったと知り、恐れ、責任を感じる。自由という個人にとっての「大義」も狂気につながると恐怖を引き起こすことをダイマーは知る。英雄気取りで、いい気になっていたことに気がついたのである。やがて男は死に、そばに座っ

て見守るダイマーには何もしてやることができない。空想の中で英雄になることは容易だが、実際の戦いに見られる残虐さにダイマーは耐えられない。ルイスは第一次大戦でフランスの戦線に赴き、負傷した経験がある。

第5章

32連から成る。自分のやった行動の結果を知り、ダイマーは生きる空しさに打ちひしがれ、自殺しようとする。「死と誕生という永久に変わらぬ営みが／意味のない正確さで繰り返される」(V-4) ことにダイマーは一種の諦観を抱く。彼は <完全な都> の存在理由にふと思いをはせる。「ぼくらの都を作った人は、正しかった。／彼らは世界というものを知っていたのだ。無限の悪意に立ち向かうには／人は身を低くしなければならない。警戒を怠らず／自然を閉め出し—自然の入る余地を与えない。／ぼくらに最初から必要なことは、／壁や牢獄、覆いなのだ」(V-14) と思うまでになっている。あれほど自由をかみしめたはずなのに、喜びはもう見いだせないでいた。

しかし、死のうとしても、肉体は本能的に生に執着する。彼は「屈服する喜びとともに内心忤怩たるものを感じたが／もうプライドにはかまっていられなくなった。・・・すべてを投げ出すことが一番だった。もうがんばる必要はない。彼はあえぎ、じっと横になったまま、生きていた」(V-25) のだ。それから彼はヒバリの声を聞き、「しめった髪の毛を顔から払い／座り直した」(V-31)。ダイマーの一部が死に、新しいダイマーが目覚めたとき、<自然> はふたび美しく眼下に広がって見えたのである。

第6章

36連より成る。ダイマーは「僕はもう戯言はいわないぞ」と言い、「僕は碎かれた。／夢はさっさと片づけて、人生を始めよう」(VI-2) と道をくだっていく。第2連において、千々に乱れていたダイマーのところが「一つになった」とあるが、これはまだ、ダイマーの思いこみであって、この章で、再び夢想の誘惑に会い、まだ「死ななければならない自己」のあることを知る。つまり、自分に対してこうありたいと思う面しか見ていないのである。

とはいえ、自殺を思いとどまったダイマーは、「何か食べなければ」と考え、道を下る。ダイマーが正気を取り戻すのは、肉体の恐怖や、空腹感、そして、ヒバリのさえずりなど <自然> の呼びかけによることは注目すべきである。

3連以降、ダイマーは新しく生きる望みを持ち、丘を下るが、「目覚めた山に囲まれた谷にやって来た。／春の水音がこだまし、水のとびはねる／音が岩から岩へと大きく響いていた」(V-3)。また、「ヒバリが繰り返し／空で歌っているようだ。風が髪をなぶった。／ここに希望がわいてきた」(VI-4)。

6章5連から第7章の終わりまでがターニングポイントになる。ダイマーは食べ物を求めて里

により、偉大な魔術師の館に招かれ、そこから脱出する過程が描かれている。

この屋敷は、「一軒の古い家」であり、「暗いイチイの垣根に囲まれて」、「塔には時計があったが、時間を示す針がなかった」(VI-5)。イチイという木は墓場によく植えられることから、暗く不吉なイメージを持っている。シェイクスピアも「二重にいまわしいイチイ」(『タイタス・アンドロニカス』)と言い、魔女が地獄のスープに入れる材料の一つにもなっている。しかも時間が止まっている空間であることから、この屋敷はリアリティのない世界を象徴している。

庭を逍遙する人物に休んでいくようすすめられる。彼はこの屋敷の主人で、その風貌は、「やさしげ」で、「月光のよう」で、「子どものよう」に見えるが、「威厳をそなえ」、「魅力的な雰囲気」がただよい、「ものうげな様子が美しく見える」(VI-7, 8)。おもわず引き込まれそうな魅力を備えた人物だが、やかましいからといってヒバリを銃で撃ったということで、彼への信頼を留保する。「歌う鳥を撃ったのですか」と問うダイマーに、主人は「ヒバリは朝から晩までさえずって／わたしの夢見を邪魔するのですよ」(VI-10)と答えるのである。「黒い木からなる垣根と、吊いのような静寂さが／庭を囲んでいた。／そして一カ所から丘の青い中腹と／白い径が見えた」(VI-11)が、丘が見えると、このせいで「夢の芸術が破られる」(VI-12)と言い、木を植えようとするのである。この詩句から、ダイマーが遭遇している人物の世界が完全に閉ざされた世界であることがわかる。さらに、「庭は嫌いだ。月が昇らないと」(VI-12)と言い、運ばれた食器は、「銀の古い、珍しい食器」(VI-14)であり、部屋には「本の山と、水晶の玉、うつろな目をした仮面」(VI-13)がある。こうしたイメージはすべて、屋敷の主がどういう嗜好をもっているか示唆している。白日のもとにさらされた現実世界を忌避しているのである。主人が話すのはもっぱら魔術の言葉であり、精霊についてであった。この人物の風貌に関して、詩人イエーツをモデルにしている。ルイスは一時オカルトに興味を持ち、イエーツの家を二度訪れている。ルイスによると、この偉大な詩人は、魔術的な世界を描くだけでなく、実際に信じているということで、ショックに近いものを感じたと述べている。その後ルイスはオカルティズムに見切りをつけたが、その経験が第6章と7章に反映されている。

主人はダイマーに話をさせ、謎めいた女性について異常なまでの関心を示し、女性は「この世の者ではなく、精霊」だと言う。しかし老婆についてダイマーが話すと、彼の顔に「かげり」が生じ、「あの恐ろしい女の形は／夢の道を悩ませ、魂の逃げ場を塞ぐのだ」(VI-18)と嫌悪感を示す。このことから、第3章でも取り上げたとおり、老婆は現実逃避をして罪の意識を鈍らすことへの警鐘であるとともに、繰り返し＜歓び＞を経験することの空しさを示すものと捉えることができるだろう。なぜなら、屋敷の主人は夢の中で、同じ至福の瞬間を繰り返すことを勧めているからである。

主人は反逆者ブランには関心を示さず、精霊である女性と巡り会った場所ではダイマーも「霊であった」と言う。彼の関心は、＜自然＞や現実ではなく、霊的な世界だけなのである。＜完全な都市＞とは対極にありながら、自閉的な世界であることにかわりはない。

「聞きたまえ、わたしは君を流れに乗せてあげられる。

彼女の国の岸边へと運んでくれる流れに。

わたしにはわかるのだ。君は一度も夢見るすべを学ばなかったことが。

しかし、毎晩君は、無造作にも

偶然がもたらすものをつかんではいろのか。君に教えてあげよう。

君の霊が行きつ戻りつするすべを。

夢が譲り受けた境界を通り抜ける方法を。」(VI-20)

この箇所は、後の物語詩「ドラムの王妃」を連想させるだろう。夢の国を憧れて、現実世界から神仙の国へと逃避する王妃の姿はこの魔術師と通底する。彼の誘惑にたいし、ダイマーは自分は「20年来ずっと眠っていた」ので、「夢の重荷といううちり」(VI-22)を払い落として、「いま僕は覚醒しているのです」(VI-23)と言う。主人は「壊れた夢の治療は、もう一度夢を見ることだ。／深く夢見ることだ」(VI-24)と主張する。さらに、「夢の中では、愚か者は軽侮の声から自由になれる。／そこでは年老いた娼婦も処女となる。／・・・／どんな真つ赤な罪も、雪のように白くなるのだ」(VI-26)と説く。「君の言う善も悪もまた夢にすぎない。弱い者を縛る枷、／はかない現世に固定し、視力を弱めるのだ。／夢へと目覚めなさい。より大きな光の中へ入るのだ。／その光は弱々しい星を癒してくれる。君が行くところには／地上の法則は何もないのだから」(VI-27)と、ダイマーの罪の意識を取り去ろうとする。「罪滅ぼしをしたい」というダイマーに向かって、主人は「徳が人を救えると思うのか」(VI-30)と反論する。そうして彼は杯を差し出し、ダイマーに飲むように勧める。

第7章

33連から成る。自制していたがダイマーは主人の説得におもわず杯を手にし、飲み、そのまま眠ってしまう。一方、主人はダイマーに語って聞かせたように幸福な酩酊にはおらず、かえって、底知れぬ闇の中であがいている姿が描かれている。

この夜がすぎて、また明日の晩がくる。

—毎晩、毎晩最悪のものが到来するまで。

このごろでは 昼間光があっても

恐怖が入ってくる。ああ、思い出すことができようか

深い眠りと夢のことを。かつては求めさえすれば

彼のまわりに到来したものを。しかし、なにか

何かボタンの掛け違い、眠りが減多に訪れぬ、今は。(VII-6)

主人は犬のように吐き始め、「不思議な天国と、もっと不思議な地獄が見えた」(VII-7)。これは「夢の国の恐怖におののきながら、夢の喜びを」(VII-8)買わずにおれない。そして、「心の根のところで吐き気をもよおす」(VII-9)のである。ダイマーに与えた飲物はおそらく何か薬物であろう。それを常用する主人の状態は、夢想は悪夢になることを示している。

やがて、ダイマーが目覚め、主人に抗議する。彼の見た夢は、「あまりにも甘美に、望みに合わせて作ったので、生きたものとならなかった」(VII-18)。それは「悲しい、冷たい、心のないもので出来た世界だ。買われた微笑のように、そこには喜びがない」(VII-19)。たしかに、夢の中で女性と出会った。美しかった。「しかし、どの部分も僕がこしらえたものではなかっただろうか。一すべてがぼくが夢見たもの—／それ以上でも以下でもない。ぼくの心の鏡なのだ」(VII-20)と、ダイマーは言う。夢の女性はダイマーに「重荷を投げ捨てるように」と言い、もう少しで彼はだまされるところだったと語る。彼が女性のまやかさに気づいたのは、彼女が「やりすぎた」せいだった。夢の女性は彼の性にしか興味を示さず、そのことから彼の求める憧れと性的な欲望にはずれがあることにダイマーは気づいたのである。「愚か者のパラダイスは消えた。その代わりにあるのは、／肉欲の王、黒い、急襲するような、真剣なまなざしの王」(VII-26)だと彼は述べる。夢はすぐに悪夢に変わることをダイマーが告げると、屋敷の主人は怒り、ダイマーに去れと命令する。銃をつかみ、逃げるダイマーに向かって発砲する。このように、7章では、ダイマーが大きく成長したことがわかる。

第8章

26章から成る。傷ついたダイマーは5連で、謎の女性と再会する。広い牧場、ひんやりとした大気、露にぬれた大地、牛の鳴き声が、魔術師の家とは対照的に、ダイマーの新しい生き方を象徴するかのようである。ダイマーは置き去りにした女性をなじるが、彼女はダイマーが「名前を聞くべきだった」(VIII-6)と答える。彼女は「雲や空の彼方の領域に住む永遠のもの」(VIII-9)であった。ダイマーは自分を呼び出したのは神々であったのに、「神々を追うことは罪になるのか」(VIII-12)と問い、「天は助けの声を発してくれないのか。塵でできたものは／暗闇のうちに自分の道を探さなければならないのか」(VIII-12)と嘆く。彼はさらに、「あなたは人の姿で現れた。美しい装いで。／ぼくを誘惑し、道でぼくを待ち伏せした／・・・愛するふりをしてぼくを罠にかけた。」(VIII-13)となじると、「求められれば、そのものが求める姿で現れるのです」(VIII-13)と答える。このときまでに、ダイマーは自分に呼びかけたものは神々であり、求めていたものは現実のものではないと気がついていただようである。しかも、みずからの内に聖さがないと、現れる姿も聖くはないことをダイマーは知らされる。ようやく、自然への愛や美への憧れは、間違った方向に人を導くことがあると知るのである。なぜなら、創り主ではなく被造物に関心を向かせるからである。

ダイマーは魔術師に撃たれた傷が痛み、早く死なせてくれと頼む。精霊は「まだ夢をみてい

るのだ」と説き、「あなたの枷をここからずっと遠くへ投げてしまったら、／前へ進みなさい。旅はまだ終わっていません。／・・・死について考えるのは／止めなさい。考えることで、ますます死の中へ落ちていくのですから」(VIII-19) と言うと、彼女は消えてしまう。

かつてダイマーという男がいた。都の中で彼は学び、
遊んだ。ぼくは彼を殺し、逃げた。
森の空き地にダイマーというものがいた。
一人で怒鳴り散らし、人の運命にたいし責任逃れをしていた。
ぼくはかれも捨てた。そして三番目のダイマーが現れ始め、
彼もまた死んだ。しかし、いまのぼくはその誰でもない。
まだ死すべきものがあるのか・・・ (VIII-24)

第9章

35連から成る。古い自己を脱ぎ捨て、生まれ変わっていくが、まだ、捨てるべきものが残っているのかと自問しながら、ダイマーは墓地にやってくる。静かな墓地でダイマーは休息をする。やがて、ダイマーは「一陣の強風が吹き、彼を舞い上げ」、「凍てつくような寒さにのどが痛み、渇きを覚えた。／そして心臓を締め付けた。これは初めてのことだった」(IX-1)。そして、角笛の音が聞こえ、彼の靈魂は昇天していく。

そしてここに、長らく身にまとった生命の衣は
彼から脱げ落ちた。希望も目的も寸足らずであった。
— 戦いのさなかに、物事の核心に向かって手を伸ばす、
盲目的な信頼さえも短すぎた。ここに
死は世界霊そのものに向かって吹き付ける。最後の支えは
落ちてなくなった — 彼自身、閃光のような魂は、
途切れることのない虚空で泳ぐのだ。彼は全きものとなり、(IX-4)

「泣いた」のである。「どうしてぼくを見捨てられたのですか」(IX-5) とダイマーはつぶやく。この箇所はあきらかに、十字架上のイエスのことばのエコーである。そして、ダイマーにはまだし残した仕事が天上で待っていた。「こんな果てしない広がり」の端で」(IX-8)、槍をかまえ、鎖帷子に身を固めた歩哨が立っていた。「夜歩くもの」を監視しているのだという。「死せる人間が、不死なるあの方と、臥所をともにした／そして生み落とされたのが、／この夜歩くもの」(IX-13) だと言う。ダイマーはその怪物が自分の息子であると知り、怪物を退治すると申し出る。夜明けが近づいた。ダイマーは大地が不毛であることを知る。「青白く、重い体を持ち、背中

には背びれがあり、／多くの目を持ち、皮膚の鱗が音を立てて」(IX-27) 獣が近づいてくる。ダイマーは槍を投げたが的を外す。次に剣を抜き楯を構える。その後の戦いについて語り手は黙する。確かなことはダイマーがあっけなく死に、平安を得たこと。遠くで見守っていた歩哨(天使)が駆け寄ると、獣がかがんでいた。その下にダイマーが四肢を砕かれ死んでいるのが見えた。そのとき、「太陽が昇った」(IX-30)のである。そして、大地は花に覆われ、まるで4月の雨に洗われたように緑に輝いた。驚くべきことに、ダイマーを殺した獣は変身を始めた。

・・・見よ、そこにいるのは獣ではなく、
空を背に大きくそそり立つ何ものか、
翼をもち、剣を携えた姿だった。泡立つ髪の毛は
肩の周りに白く被さり、そこから
発する空気は燃えるような熱さだった。純粋な
肉体全体に生命が満ちあふれていた
いっばいに満たした椀のように。(IX-34)

ダイマーの自己犠牲が獣の中にあった聖でない部分を浄化し、獣は神になったのである。天上の秩序は、地上に及ぼされ、「罪のない春を連れ戻した」(IX-35)のである。このように天上界と地上界が照応しているとみるのは、中世的な宇宙観であるが、ルイスはそれを援用している。こうして、ダイマーの魂の遍歴は終わる。

ダイマーの意味

「ダイマー」はルイス自身の青春の総括であるといつてよい。自意識がふくれあがり、精神と体のバランスを欠きながら、それに目をつぶるため、空想世界にのめり込んでしまう。そして、空想世界の安逸さは、結局自己愛にすぎず、なんの解決にもならないことをルイスは経験する。それをルイスは「クリスティナ・ドリーム」と呼び、そこからの脱却を自分に課していたのがこの詩を書いていた時期である。サミュエル・バトラーの『すべて肉なるものの道』(*The Way of All Flesh*)に登場するクリスティナ・ポンティフェックスから命名した「クリスティナ・ドリームとは、愛の夢は人に現実の愛を持てなくし、英雄の夢は人を臆病にするということ」だと、ルイスは日記に記している(1922.5.24付け日記、*All My Road Before Me*, 39)。

ルイスはこの詩をとおして、青年期彼を苦しめたいくつかの問題を昇華しようとした。一つは痛みを伴うほどの名状しがたい＜憧れ＞の追求であった。幼い頃から、＜喜び＞または過剰なまでの＜憧れ＞に突き動かされていた。事実、ルイスの著作はほとんど＜憧れ＞がテーマであると言っても過言でない。しかも、＜自然＞や神秘的なものを介して＜憧れ＞が訪れることから、彼はそれをロマンティズムと呼んでいた。ロマンティズムの極端な形である

オカルトにも一時期関心をもったことがある。そうした関心がクリスティナ・ドリームに一層拍車をかけたのだという。また、オクスフォード大学時代はフロイトの心理学に注目が集まり、空想や願望は性的なものに還元されることや、性的な空想に抑制がかけられていることをルイスも学んだ。「ダイマー」を書いていたころには、オカルトからはすでに卒業しており、「どんな種類であれ、魔術や霊能主義は幻想であり、その中でも最悪のものである」(“Preface”)と結論していた。オカルトに耽溺し、身を滅ぼした学友がいたことも、オカルトへの反感を強めたのである。

もう一つルイスが長い間こだわっていたのは「父と子」の関係である。ルイスの父は彼が必要とするときほとんど応えてくれたことがなかったようである。キリスト教に回心してからも長らく父を許すことが出来なかったと述懐しているくらいである。一方、精神を病む人の中には、父と子のこじれた関係が原因のことが多いことをルイスは知った。青年期のルイスにとって父と子の関係は大きな問題であったのだ。「ダイマー」には「父親殺し」というテーマが含まれている。ギリシャ神話では、クロヌスがウラヌスを殺し、神々のリーダーとなる。そのクロヌスをまた息子のゼウスが殺し、神々の頂点に立つ。そして人間はたえず、父ともいべき神に反発する。「創世記」のアダムの罪も父と子の対立構図の中でみることもできるように、「父親殺し」は神話の大きなテーマである。＜完全な都＞でダイマーは教師を殺すが、これも父親殺しの一形態である。このことが契機となって暴動が起きるが、「父親殺し」は同時に秩序の崩壊を意味するのである。最後にダイマーは自らを投げ出し息子に殺されることにより秩序を回復する。進んで息子に殺されることで、父親殺しという悪循環に終止符を打つのである。

「ダイマー」を書いていたころ、ルイスは無神論ではなかったが、キリスト教を受け入れるまでにはいたらず、どちらかというと観念論的な考え方に傾いていた。したがって、第9章に登場する天使も詩作上便宜的なものであり、信仰があったわけではなかったと「序文」に記している。ただし、このころには＜憧れ＞に関しては、誤った方向に人を導く危険性があるということをすでに認識していたということはいえる。人間の身体もふくめた＜自然＞は「聖でもあり、聖でない」と考えた点で、過度に自然を美化するロマンティズムにたいしてすでに距離を置いていたと考えられる。

この詩はルイスの個人的な問題が色濃いことは事実であるが、＜完全な都＞から19歳で目覚めたダイマーを描いた章は、J・S・ミルを思い出させるだろう。ミルは幼い頃から、徹底的な合理主義、功利主義的教育方針で育てられ、感情は卑しいものとして一切の情操教育を受けることはなかったが、20歳の時、音楽や詩歌によって目覚めたことが『自叙伝』に記されている。それから、ワーズワースやコールリッジなどロマン派の詩を読み、父親やベンサムの影響から抜け出すことができたと述べている。とすれば、ミルも一種の「父親殺し」を通過したことになる。ダイマーにみられる自然への反応、強烈な自意識の目覚めや性への関心などは、一個人に限ったことではなく、青年期に大多数が通過するイニシエーションのプロセスといえよ

う。

「ダイマー」の最終章は「贖い」がテーマになっているが、彼の昇天や息子である怪物との対決はイメージとしては効果的とはいえ、唐突な感がどうしても残るのである。おそらく、観念上の解決にすぎなかったからではないだろうか。想像世界と現実世界のせめぎ合いにルイスはつねに悩んでおり、その対立が融和するのは回心後のことである。十代でジョージ・マクドナルドの『ファンタスティース』を読み、空想性に「聖性」を感じていたが、回心後それを「受洗した想像力」と呼び、高く評価するようになる。こうして、ルイスは『天路退行』にたどり着く。そこでは、遍歴の軌跡がはっきりと描かれ、生きる意味があらためて語りなおされるのである。

「ダイマー」の書評はおおむね好評であったと冒頭に記した。なかでも、ディリス・パウエルは高く評価しているが、同じテーマを散文で読みたいと締めくくっている（『サンデー・タイムズ』1926.9.19）。また、『ドラムの王妃』に関しても、ノーマン・ニールセンが「散文で書けばすばらしかっただろう」と評している（『チャーチ・タイムズ』、1969.12.24）ように、ルイスの詩は、テーマとして実に面白いが、散文で表現した方がずっと彼の才能がいかされたであろうといわれてきた。こうした批評をとおして、詩人としてのキャリアに徐々にみきりをつけていくルイスが伺われる。

引用文献

- Lewis, C. S. "Dymer", C. S. *Lewis Narrative Poems* Ed. Walter Hooper, Harcourt Brace Jovanovich, 1969.
——. "Preface", *ibid.*
——. *All My Road Before Me* Ed. Walter Hooper, Harcourt Brace & Company, 1991.
George Sayer. *Jack/C. S. Lewis and His Times*, Harper & Row, Publishers, 1988.

参考文献

- Lewis, C. S. *The Pilgrim's Regress*, William B. Eerdmans Publishing Co., 1981.
Hooper, Waler. *C. S. Lewis: A Companion & Guide*, Harper San Francisco, 1996.
Sayer, George. "Dymer", VII (SEVEN): *An Anglor-American Literary Review*, Vol. 2, Wheaton College, 1981.
King, Don W. *C. S. Lewis, Poet*, Kent State University Press, 2001.
Mill, John Stuart. *Autobiography and Literary Essays* Ed. John M. Robson *et. al*, University of Toronto Press, London, 1981.
オードリー・ウィリアムスン. 『ワーグナーの世界』 中矢一義訳、東京創元社、1976.